S. Iwamoto

大阪私立短期大学協会研究報告集第19集抜刷　昭和57年度

「ジョン・ウェスリ研究の現況」

大阪基督教短期大学　岩　本　助　成

「ジョン・ウェスリ研究の現況」

大阪基督教短期大学　岩　本　助　成

ジョン・ウェスリ(1) (John Wesley 1703—1791) は、第18世紀英国がうんだ逸材である。彼は今日、全世界に及んでいるメソジスト運動の創始者として著名である。しかし彼の影響は、宗教をこえて思想、文化、政治、経済といった多方面に亘っている。時あたかも、宿望の「ウェスリ著作集」全34巻の刊行が、オックスフォード大学の Clarendon Press から始まった。新しい校訂版は、約100年前の古いジャクソン版などに取って代わりつつある（既刊3巻）。

予告されている著作集の内容は、以下の通りである。第1巻—第4巻　説教、第5巻—第6巻　新約注解、第7巻　讃美歌集、第8巻　公私祷集、第9巻　メソジスト協会史、第10巻　協会会議録、第11巻　教理文書集、第12巻—第13巻　神学諸論文、第14巻—第15巻　牧会、倫理に関する指導書、第16巻　自然哲学及び医薬に関する諸論文、第17巻　彼自身が編集した諸文書、第18巻—第24巻　日記、日誌、第25巻—第31巻　書簡集、第32巻—第33巻　参考文献、第34巻　索引と補遺。これらオックスフォード版の刊行とともに、今後ますます、本格的な研究が開花するであろう。(2)わが国においても世界が注目するすぐれた著作が世に問われてきた。(3)

筆者も幸い、1981年度、メソジスト研究センター (Methodist Study Centre, London、ロンドン大学と提携) の研究の一端に加えられた。(4)これらの研究を通じて知った、英国を中心とするジョン・ウェスリ研究の現況を報告することが、本小論の目的である。小論により、ウェスリ研究を志す者が今日の研究傾向を知り、自らの研究への一指針とされるならば、望外の喜びである。

I

ジョン・ウェスリ研究にとって最も重要な点は、英国史、ひいてはヨーロッパ史を中心とする歴史的研究と、ジョン・ウェスリ自身の神学思想に関する考察とを、いかに深く関連づけるかにかかっていると言えよう。従って、今日の研究傾向も、まずウェスリの歴史的背景の解明に力を注ぐ方向にある。そこでわれわれは、名誉革命 (1688年) からジョージ1世 (1714—1727) にいたる40年間の政治史的検討からその考察を始めよう。

アームストロング (A. Armstrong) は、いわゆる名誉革命体制をめぐって、示唆に富んだ年表を示す。(5) 1662年の「礼拝統一法」(Act of Uniformity) により、英国国教会は、まずその「左翼」を失った。1559年の旧法は『祈祷書』の使用を命じていたが、信仰箇条すべての承認を聖職者に強制していなかった。従っていわゆるピュリータン聖職者も教会禄を受け得た。しかし新法は、『祈祷書』に含まれている全事項への同意を誓約させるものであった。その結果、禄を受けていた長老派や独立派の2千名近い聖職者（当時の教会禄の20パーセント以上に及ぶ人々）が追放された。

次に1689年、全国民を代表すると主張する議会が、ウィリアムとメアリを、それぞれ国王と女王として宣言した事実に注目したい。それは選出国王制の回復を示し、又、王権神授説の拒否を示す。ウィリアムに対する臣従の誓いを拒否した「臣従拒誓者」(Non-Jurors) グループをうんで、教会はその「右翼」を失った。懐柔策の失敗は、同年の「寛容令」発布となって現われた。今や宗教は、「選択できる事柄」となった。(6)

さて、この時期に注目すべきいくつかの項目を、簡単な説明とともに挙げておこう。①ラティトゥーディナリアニズムは、第17世紀中半、ケンブリッジ大学からうまれたもので、「ケンブリッジ・プラトン学派」はその代表的存在である。キリスト教の合理性を説き、一方では教会の伝統的信条や教会組織を軽視し、他方では宗教的熱狂を警戒した。ティロトソン (John Tillotson 1630—94) やテニソン (Thomas Tenison 1636—1715) らが有力な指導者であった。ただ、彼らの傾向が英国の宗教生活に低調を招き、ウェスリらの福音信仰覚醒運動への刺激となったことは否めない。②単に宗教問題においてだけでなく、相互の利害や国際問題をめぐってもくりかえされたトーリーとウィッグの対立と確執に注目したい（非国教徒各派の対立と確執も看過できない）。特に、「便宜的国教徒防止法」(Occasional Conformity Act) が1702年に法案として提出されて以来、3度も否決された上で1711年にやっと成立し、1719年には廃止の憂き目に会うという過程は、非国教徒に対する両派の態度を見る上からも興味深いものがある。(7)③くりかえされる圧迫に対し、非国教徒（主なものとしては、Presbyterians, Independents, Baptists）はどのように対応したか。一例として彼らが行なった学校教育を考えたい。輩出され

たデフォー（Defoe 1660—1731、処女作『ロビンソン・クルーソー漂流記』）、サミュエル・ウェスリ（Samuel Wesley 1662—1735、ジョンらの父）、バトラー（Joseph Butler 1692—1752, 『宗教の類比』の著者）ほか、多くの学者、政治家、宗教家らの存在を見ても、非国教徒学園教育の重要さがわかる。④碩学ノーマン・サイクス（Norman Sykes）は、この時期のキリスト教を「実践的キリスト教」と呼ぶ。[8]その実践は、Oxford や Cambridge と並んで自然科学、古典研究、近代語研究、哲学及び歴史の分野での研究を進めた上述の教育機関のほかに、Charity School Movement や病院設立運動となって現われた。愛の実践によって信仰の実を示そうとする気風は、混乱と抗争の中でも決して失われなかった。更に S.P.G.（1701年）や S.P.C.K.（1798年）の設立、ジョン・ウェスリとの関連で重要なソサエティ運動の起源と発展などが研究されている。

Ⅱ

目を「知的革命」の分野に転じてみよう。この時期のことをフランスの史家ポール・アザール（Paul Hazard）は、「ヨーロッパの良心の転機」と呼んだ。バターフィールド（Herbert Butterfield）は次のように述べている。この科学革命は、「科学における中世の権威のみならず古代のそれをも覆えしたのである。つまり、スコラ哲学を葬り去ったばかりか、アリストテレスの自然学をも潰滅させたのである。したがって、それはキリスト教の出現以来他に例を見ない目覚ましい出来事なのであって、これに比べれば、あのルネッサンスや宗教改革も、中世キリスト教世界における挿話的な事件、内輪の交替劇にすぎなくなってしまうのである。」[9] ガリレオやニュートンは宇宙を見る目を提供する。科学器械、とくに望遠鏡や顕微鏡といった測定器械が作り出されたことは、重要な出来事であった。科学革命が「理性の時代」の道を拓いた。

人は「自然宗教」に安住できなくなった。1695年、『キリスト教の合理性』においてロック（John Locke 1632—1704）は、キリスト教を理性人にとって理解可能なものへ還元しようと試みる。上述のバトラーは、この時期に中心的役割を果たした人物である。彼はすべての奇跡を否定し去ろうとする理神論者（Deists）を批判し、啓示宗教と自然宗教とを「類比」でつなごうとする。自然において「蓋然性」を認めるなら、なぜそれを啓示にも適用しないのか。バトラーは又、政治思想や倫理思想の展開にも寄与した。自由、博愛、幸福追求の道は、信仰や思想を異にする福音派の人々の共鳴を呼び、社会悪に対する協同した攻撃となって現われてきた。バトラーとウェスリという両雄が、最終的には相互を理解し得なかったことは、第18世紀英国のために遺憾とすべき点である。[10]

Ⅲ

第3の研究分野は、「ハノーヴァー王家（1714年以後）のもとにある教会の状況」を検討することである。たとえば、産業革命へとつながっていく産業化の波に対して、なぜ英国国教会の対応が充分でなかったのかを問うこと等である。産業化のいくつかの要素は、この時期に市民生活の底辺から持ち上がってきた。新しい基礎的原料、新しい燃料開発、新しい機械の発明は、新しい作業機構の拡大、交通や通信の発展及び技術的諸変化をうんでいく。それは又、農業の改良、経済的変動、経済的変化への政治的対応、都市の成長と労働運動の展開に伴う社会的、文化的変貌となっていった。しかしこのような産業化から産業革命への発展が、社会のいたるところに大きなひずみを残したとしても不思議ではない。このひずみの一つについて、トレヴェリアンはこう述べる。「十八世紀独自の進歩は、風儀や厳格な美徳においてよりも、習俗と知性において顕著であった。賭博は富者の間で今日以上に流行し、深酒が悪徳であるとはほとんど考えられなかった。上流階級の最上位の人々は、来世の準備よりも現世の充実した合理的な悦楽を目的とし、来世については、稀にしかも陽気そうな懐疑をいだきながら語った。……十八世紀の開化の事業……の大きな欠点としては、あらゆる形の熱情に水をかけたこと、貧民、とくに大都市、炭坑および工業地帯における貧民を無視していたことをあげることができる。」[11] 教区制は時代の変動に合わなくなっていた。1743年、ヨークの大主教は、836教区中、無牧教区が393教区もあること、711人の聖職者中、335人が兼職者であることを明らかにしている。ジョン・ウエスリらの運動が始められる時代的要請はすでに整っていたと言えよう。

このほか、当時の教区教会がどのような状況にあったかを、諸記録から調べる研究も進み、各方面から当時の全体像を浮き彫りにする試みがなされている。[12]

Ⅳ

研究の第4分野は、「初期福音派」（the Early Evangelicals）と呼ばれている人々とその背景の考察である。ウェスリやメソジストについての研究者が銘記しておかねばならない点は、いわゆる「福音信仰覚醒運動」（the Evangelical Revival）が、ウェスリの体験や行動から始ったのではないという事実である。4つの前史が存在し、先駆者的役割が果されていた。①ドイツ敬虔派の存在である。[13] シュペーナーやフランケに関する研究も、近年、活発である。②アメリカにおける「大覚醒」（the Great Awakening）の中心的存在は、エドワーズ（Jonathan Edwards 1703—1758）である。彼の研究

もアメリカを中心に盛んとなってきている。カルヴァン主義神学を説いたこの神秘家によって、信仰復興やキャンプ・ミーティングの波が拡がった。③ツインツェンドルフ (N. L. Zinzendorf 1700—1760) を創始者とするモラヴィア派の存在に注目したい。ウェスリとの類似点と相違点はかなり論議されてきた。心の宗教、新生、イエスへの信従、小グループによる聖書の学びや祈りや活動など、ウェスリがこの派及びドイツ敬虔派に負うところは多い。④ウェスリが最も多くを負うているのは、英国内における福音派の活動である。ホーネック (Anthony Horneck 1641—1697) と彼のソサエティ運動は、すでに1678年に始められている。S.P.C.K. や S.P.G. については既に触れた。貧民層にとって、慈善学校は唯一の初等教育機関であった。検討すべき人物は、ウェスリの同労者で彼に大きな影響を与えたホィットフィールド (G. Whitefield 1714—1770)、ハリス (H. Harris 1714—1773)、ウェールズを1736年に巡回伝道していたローランズ (D. Rowlands) やハンティングドン伯夫人セリナ (Selina 1709—1791) などで、セリナは1781年にそのソサエティを結成している。研究者間でも、たとえば Cragg 教授と Wood 教授は彼らへの見方を異にする。[14] しかし、「福音派」の豊かな流れなしにウェスリの活動はあり得なかったし、今日にいたる同派の多様な流れも継承されてこなかったであろうという点では、意見の完全な一致を見ている。[15]

V

以上の諸点に関する研究を進めながら、われわれの考察は、ウェスリその人と彼の思想についての研究へと至る。この領域の研究は、次の諸点に亘っている。

① ジョン・ウェスリの個人史的考察

彼の祖父は、父方、母方ともに非国教徒であった。父サミュエルと母スザンナが国教会へと転じ、父は政治的関心の強いトーリー高教会人であり、母は "method" の伝統を彼に伝えた。オックスフォード大学クライスト・チャーチへ進んだ彼は、そこでア・ケンピス、ジェレミー・テイラー、ウィリアム・ローらを耽読し、有志とともに大学内に "The Holy Club" を結成する。聖職者の道を歩み出すが、ジョージア伝道の熱情は、逆に彼自身の信仰の確かさの所在を問わせる結果となった。モラヴィア派の影響を受けつつ、福音信仰の基盤を形成する体験を与えられた。1738年5月のことである。

前述のとおり、当時の英国は時代の変動期を迎え、社会的ひずみに苦しんでいた。ウェスリらは、自ら好んで選んだ形においてでなく、止むを得ぬ状況のもとで先人たちが試みた野外伝道や信徒伝道という方法を採りつつ、教会に背を向けている人々、教会からも忘れ去られていた中流層以下の人々の中に入っていった。「組会」(Class meeting) 組織が草の根運動のように根づき、各ソサエティを統轄する「年会」が発足して、ウェスリらの運動は本格化する。その蔭に、他の諸事情が重なったとは言え、彼の不幸な結婚生活のあったことも忘れ得ぬ。1784年、Coke らへの按手礼は、彼の願望や意図を離れて、メソジスト運動の国教会からの離反を形づくっていく。[16] ウェスリの影響には、社会的政治的に拡がりを見せ、殊に、奴隷制の問題、刑務所改良運動、労働運動、教育事業、新興の米国国内の諸問題への解決などに寄与するところが大であった。

② ジョン・ウェスリの神学思想。

デーヴィス (R. E. Davies) は、ウェスリの神学思想を以下の4点に要約する。[17] ⓐ すべての人は罪人である。ⓑ すべての人は救われ得る。ⓒ すべての人はこの救いを理解し得る。ⓓ すべての人の救いは完成され得る。以上の叙述は又、次のようにも表現できる。ⓐ 神の普遍的な愛の絶対性。ここには、ウェスリに流れ込んでいる国教会アルミニウス主義思想の痕跡が見られる。ラップ教授 (E. Gordon Rupp) はこれを、"Optimism of Grace" と表現する。[18] ウェスリは神の先行的な愛と恵みを高調した。ⓑ 個人の信仰の必要性。信仰は神の賜物であり、神への信頼である。それは又、確信でもある。位置や立場の変化だけでなく、生活や状況の革新をも意味する。モラヴィア派やホィットフィールドから袂を分かたざるを得なかったのは、この点においてであった。ⓒ 神の恵みの無限性。有名な「完全論」は、その源流を聖書に持つ。更に、国教会改革者の義認信仰、モラヴィア派の確証の教理、古代教父の恩恵論、当時のピューリタンやカトリック派に学んだ霊想、ニュッサのグレゴリオスの完全論、急進的プロテスタントが採用していた諸方法など、に彼は多くを負うている。「完全論」は「全き愛」と定義し得る。それは誤謬を犯さなくなることでもなく、欠点や失敗がなくなることでもない。神の賜物としての神と隣人への愛に、「今、ここで」満たされる生活を言う。それは到達してしまったというような静止的段階ではなく、止まることのない成長過程である。[19]

彼の完全論は、『説教集』などで高調されたばかりでなく、チャールズらと共に作った『讃美歌集』を通しても伝えられた。メソジスト運動における讃美歌運動の研究も進められている。[20]

③ メソジスト運動の進展と他グループとの関連をめぐる研究

この課題に関しては、3人の代表的研究者がいる。ハイデルベルク大学のシュミット (M. Schmidt) 教授は知的方面から、[21] オックスフォードのウォルシュ (J. D. Walsh) は社会的、政治的側面から、[22] ギルバート (A. D. Gilbert) は社会学的角度から、[23] それぞれメ

ソジスト運動の進展過程を追う。この運動は反発や抵抗と出合いながら、そして支援や内部革新に支えられながら、「協会（ソサエエィ）」から「教派」への道を辿る。その運動が進展した地域は、国教会教区の比較的弱体であった所が多く、又、新興工業地帯において顕著であった。

VI

以上、述べてきた研究課題以外にどのような研究が進められているか。紙幅の許す限り触れておきたい。

① 「寛容法」からフランス革命にいたる時期の非国教徒に関する研究。

最近、特にこの時期におけるローマ・カトリック派の研究が進み、彼らとメソジストとの比較研究がなされている。(24)

② 啓蒙主義思潮やアメリカ、フランス両革命による衝撃に関する研究。

啓蒙主義思潮とウェスリ思想との比較研究が進んでいる。(25)「世俗化」の問題、新しい世界観の樹立、ピエール・ベール（P. Bayle）の『歴史的批評的辞典』（1697年）、フォントネル（Fontenelle）の『世界多数問答』（1686年）、モンテスキュー、ディドロ、ヴォルテール、レッシング、カントら思想家との関連が問われている。

メソジスト運動は新興のアメリカにおいて一大開花を見たが、フランス革命ともども、両革命が教会と国家との関係に与えた影響が検討されている。

③ 英国諸教会に対する産業革命の衝撃に関する研究。

この分野での研究も盛んであり、従って異なった見解も多い。産業革命によってもたらされた諸変化に対する国教会の対応が固定的であったのに対し、非国教徒は柔軟な対応をもって新興層を吸収した。(26)

④ 国教会内における福音信仰復興運動に関する研究。

シメオン（C. Simeon 1759—1836）を代表的人物とする国教会福音派の思想家についての研究が進んでいる。

⑤ 第18世紀末におけるメソジスト運動。

この分野では、ⓐ どのようなメソジスト運動指導者が輩出したか、ⓑ 伝道者と民衆との間には、どんな関係が生じたか、ⓒ 国教会との関係はどのように発展したか、などの諸問題が検討されている。

註

(1) 日本の神学界では『キリスト教大事典』における如く、「ジョン・ウェスレー」という発音表記が用いられている。より正しいと思われる表記は、「ジョン・ウェズリ」又は「ジョン・ウェスリ」であろう。筆者は『岩波西洋人名辞典』ほかに基づき後者を採った（*Proceedings of the Wesley Historical Society*, vol. 34, pt. 2, p. 48 参照)。

(2) 1893年に設立された The Wesley Historical Society 及び World Methodist Historical Society の活動が中心的なものとなろう。好論文が両学会誌に出る。

(3) 野呂芳男、『ウェスレーの生涯と神学』、東京、日本基督教団出版局、1975年。岸田紀、『ジョン・ウェズリ研究』、京都、ミネルヴァ書房、1977年など。

(4) この機会を借り、本報告の骨子となるものを教示して下さったバーミンガム、クィーンズ・カレッジの J. Munsey Turner 氏と、筆者の tutor の役割を果されたハル大学の John A. Beardsley 氏に、謝意を表しておきたい。
なお参考文献としては、G. R. Cragg, *The Church and the Age of Reason*, Middlesex : Penguin Books, 1960, R. E. Davies, *Methodism*, Middlesex: Penguin Books, 1963, S. Andrews, *Methodism and Society*, Lordon : Longmans, 1970, A. Armstrong, *The Church of England, the Methodists and Society 1700—1850*, London : Univ. of London Press, 1973, A. S. Wood, *The Inextinguishable Blaze*, London : Paternoster, 1960 のほかに、D. C. Douglas (ed.) *English Historical Documents* 及び *Oxford History of England* (G. N. Clark, B. Williams, S. Watson, eds.) のシリーズが有益である。

(5) Armstrng, *op. cit.*, pp. 46—48.

(6) 塚田 理(編)、『イギリスの宗教』、東京、聖公会出版、1980年、浜林正夫、『イギリス名誉革命史、上』、東京、未来社、1981年など参照のこと。

(7) 長沼忠兵衛「名誉革命体制成立期における政治と宗教の相関—便宜的遵教防止法の命運を中心に—」、『紀要、人文３』、富山大学、に詳しい。

(8) N. Sykes, *The English Religious Tradition*, London : SCM, 1953, p. 56.

(9) バターフィールド、渡辺訳、『近代科学の誕生(上)』、東京、講談社学術文庫、14頁。

(10) 他にバジル・ウィリー、三田ほか訳、『十八世紀の自然思想』、東京、みすず書房。
G. V. Bennett, *The Tory Crisis in Church and State 1688—1730*, London : Oxford Univ. Press, 1975 など参照のこと。

(11) トレヴェリアン、大野監訳、『イギリス史３』、東京、みすず書房、13頁—15頁。

(12) N. Sykes, *Church and State in England in th*

18th Century, Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1934 が今日も尚、最も重要な文献である。

(13) テンプル大学の F. E. Stoeffler 教授による、最近の一連の著作は注目に値する。 *The Rise of Evangelical Pietism*, Leiden : E. J. Brill, 1965 ほか。

(14) Cragg, *op. cit.*, pp. 93—106, 174—192, Wood, *op. cit.*, pp. 26—92, 129—147.

(15) Bennett and Walsh (eds.), *Essays in Modern English Church History*, Lordon : A. C. Black, *Aspects de l'Anglicanisme*, Paris : Presses Univ. de France, 1974 を参照のこと。

(16) 拙稿「1784年の按手礼をめぐって」、『神学と人文』(大阪基督教短期大学紀要) 第19集、及び「ジョン・ウェスリとその両親」、『神学と人文』第21集を参照。

(17) R. E. Davies, *op. cit.*, pp. 94—121.

(18) E. Gordon Rupp, *Principalities and Powers*, London : Epworth Press, 1952, pp. 76—93.

(19) F. Baker, *John Wesley and the Church of England*, London : Epworth, 1970 及び *A History of the Methodist Church in Great Britain*, (Davies and Rupp, eds.) London : Epworth, vol. 1, 1965, vol. 2, 1978 が標準的な文献である。

(20) Manning, Bett, Gregory, Rattenbury らの労作がある。

(21) M. Schmidt, *John Wesley* (ET), vol. 2, pt. 1, London : Epworth, 1971, pp. 72—230.

(22) J. D. Walsh, "Methodism and Mob", *Studies in Church History*, vol 8, Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1972, pp. 213—228.

(23) A. D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England*, London : Longmans, 1976, pp. 17—121.

(24) J. Bossy の研究に負う所が大である。

(25) Hampton, Hazard, Gay らの概説のほかに、*New Cambridge Modern History*, vol. 9, chapter 6, (Walsh) などがある。

(26) Hobsbawm (マルキストの視点から), Ashton (経済史家の視点から) のほか、H. Perkin の研究が優れている。